

空手道について

平成26年6月15日

西東京本部 浜田山支部

畠山 翔大

私が知人の紹介で父親と弟と共に月心会の道場の門を叩いたのは約8年前のことだった。当時の私は特に運動ができる訳でも無く、ただ周りに流される形で始めていた。入門してからは色々あった。母親と末弟も入門したことで家族が空手一家になったこと、骨折や受験勉強による一時的な休会、徐々に自分の体格が良くなっていく事などで私の人生は少なからず変わっていったと思う。自分に対して自信が更に増え、積極性も少しは増えたと思っている。特に高校生になってからは顕著に感じるようになった。現在通っている高校が少し特殊であり積極性の少ない生徒ばかり集まる中で余計に感じるかもしれないが、ポジティブシンキングが良い方向に流れているなど感じている。

私にとって空手道とは「人生をいい方向に変えられる希少な財産」と思っている。入門する前はゲームのことなど将来の自分のための具体的な未来予想図を描けていなかった。しかし今は心身共に「力」を手に入れる事により自分の未来予想図がフローチャートとして浮かんできたり人を救うために身体的な力を使ったりと自分が昔に比べて「人が良くなった」と思えるように少しはなれた気がする。特に高校生になってからは一般の初段を再取得したことにより下級生に対して指導をする立場が増えた。この指導も自分にとって「人に対して如何に自分の技術を継承していくかの研究、発想の引き出し」と考えている。この発想力の展開は高校生活の中でも最大限に活用されていて改めて空手の大切さを知った。

また、西東京本部の大黒柱である市川教士には本当に感謝している。空手だけでなく、楽しむことや人間付き合いなど「心」も大切にしている方だと思っている。だから今の私には「人を大切にする精神」や「大切な人を最後まで守る大切さ」があると思う。

私はこの2段補審査が終わると本格的に自分の夢に向かって走り始めなければならない。もしかしたらこれが今迄の空手人生の終点かもしれない。でも培ってきた財産は永遠に失わないと確信している。私はこれまでの空手に後悔はしていない。「物理的な力」は無理でも「考え方、人を敬う心」は世界中の人に伝えられる。自分の「空手道」の一つのとても大きなまとめをしっかりと刻んでいきたい。